

イエナ・プランと「大学附属フレーベル幼稚園」

佐久間 裕之
(玉川大学)

はじめに

周知のとおり、ペーターゼン(Peter Petersen, 1884-1952)を一躍有名にした「イエナ・プラン」(Der Jena-Plan)は、NEF(New Education Fellowship)第4回国際会議(1927年)において発表されたものである。それは彼が既に1924年4月からイエナ大学附属学校で取り組んできた内的学校改革の成果を公表したものであった。ただし、この改革案は初等中等学校段階を対象とするものであり、当初はまだ就学前教育を含みこんだものではなかった。しかし、その後約10年の時を経て、ペーターゼンは附属学校にフレーベル幼稚園を併設し、さらに幼稚園と初等中等学校の有機的な接続を訴えるようになるのである。本発表では、ペーターゼンがイエナ大学附属学校に併設した「大学附属フレーベル幼稚園」(Universitäts-Fröbel-Kindergarten der Friedrich Schiller-Universität in Jena)について、その設立までの経緯をたどり、イエナ・プランにおけるこの幼稚園の位置付けを探ることにする。

1. 就学前教育への関心

1924年4月以来、ペーターゼンはイエナ大学附属学校で後に「イエナ・プラン」と命名される内的改革の実践を行った。この附属学校は年齢別学年学級制を廃止し、異年齢集団によるグループ編成を一つの特徴としている。ペーターゼンの弟子ディートリッヒ(Theo Dietrich)によれば、イエナ・プランにおける異年齢集団の編成は、たいてい下級集団(Untergruppe、第1~3学年)、中級集団(Mittelgruppe、第4~6学年)、上級集団(Obergruppe、第7~8学年)、青年集団(Jugendlichengruppe、第9~10学年)の4段階からなるという(Dietrich 1995: 72)。ただし、このようなグループ編成は当初から確定していたわけではない。むしろペーターゼンは、当初「どの年齢が最もよく適合するのか、そもそもどの程度の年齢の幅がゆるされるのか、ということについて何ら決定的なことが言えない」と述べていた(Petersen 1927: 21)。前述の集団編成は、イエナ大学附属学校での実践を通じて徐々に成立していったわけである。

ところで、イエナ大学での教育実践が開始された1924年4月当初、この大学に附属学校はあったが、まだ就学前教育に関する施設はなかった。さらに「大学附属フレーベル幼稚園」(Universitäts-Fröbel-Kindergarten der Friedrich Schiller-Universität in Jena)が併設されるに至るのは、約10年後の1934年5月のことである。しかし、ペーターゼンはそれまで就学前教育に関心がなかったわけではない。ただし、その関心はフレーベル幼稚園への関心としては表面化してこなかった。むしろ彼の関心はまず、同時代に生きたモンテッソーリ(Maria Montessori, 1870-1952)への関わりという形で現れたのである。

2. モンテッソーリ教育学への関心

著名なペーターゼン研究者のレッター(Hein Retter)によれば、ペーターゼンは1923

年にイエナに開設された「モンテッソーリ子どもの家」(Montessori-Kinderhaus)とその翌年に設立された「モンテッソーリ基礎学校」(Montessori-Grundschule)を重要な就学前教育の拠点と見なしていたという(Retter 2007:169)。

ペーターゼンの前任者ライン(Wilhelm Rein)がイエナ大学で行っていた「休暇コース」(Ferienkurse)はこの大学を「教育学のメッカ」にしていたとされる(Kluge 1992:149)。これを新たな名称「教育週間」(Pädagogische Wochen)のもとに展開したのがペーターゼンである。1926年6月にイエナ大学附属学校で行われた初めての「教育週間」で、ペーターゼンはモンテッソーリ教育学を題材に取り上げた。彼はモンテッソーリ子どもの家の代表者、エリザベト(Elisabeth Hierl)を招聘し、モンテッソーリ教育学の実践に関する導入を行った。また、プログラムの中にはイエナにあるモンテッソーリ施設訪問も含まれていた。1927年10月に行われた第4回目となる「教育週間」のプログラムにもエリザベトの講演が記されている。

そのほかペーターゼンの論文指導にも注目しておきたい。ペーターゼンがイエナ大学で指導した最初の博士論文はエーリッヒ・ラッシュ(Erich Lasch)「ドイツの基礎学校にとってモンテッソーリ・メソッドからどのような理論的実践的視点が生じるか」(1924年6月6日付)であった。イエナ大学就任当初からペーターゼンはモンテッソーリ教育学研究にも関わりをもっていたことがわかる(Retter 1996:385)。

以上のように、ペーターゼンはイエナ大学の教授に就任当初からモンテッソーリ教育学へ少なからず関心を寄せていたことが、あるいは関心を寄せるに至る環境があったことが窺える。しかし一体、なぜ、関心の矛先がモンテッソーリに向かったのか。これについては、モンテッソーリが既にヨーロッパの新教育運動を牽引する代表者であり、2人とも新教育の国際組織NEFのメンバー同士であったことが少なからず影響しているかもしれない¹。しかし、それは本質的な理由ではないであろう。むしろ、ペーターゼンにとってモンテッソーリは、当初、就学前教育について彼が認識していたある問題の解決に貢献できる思想の持ち主であると期待されていたからであると思われる。ペーターゼンは次のように述べている。

彼女〔モンテッソーリ〕が幼稚園の実践を効果的に活性化してきたという点で、彼女の活動はフリードリヒ・フレーベルの信奉者たちによって繰り広げられてきた実践の科学的な再考と浄化であると見なすことができる。(Petersen 1926: 74f.)

フレーベルの信奉者たちが行ってきた幼稚園教育のどのような点に、どのような問題があるとペーターゼンが認識していたかは明らかではない(この点、今後さらに研究し、確認していかねばならない)。しかし、彼はこれまでの幼稚園教育が「科学性」という観点

¹ モンテッソーリとペーターゼンとの直接的な交流についての証拠はまだ見つからない。しかし、モンテッソーリ教育実践家マルガレーテ(Margarete Aurin)が第二次大戦当初、ペーターゼンと対話したときのことを次のように報告していることから、ある程度は傍証される。すなわち、「ペーター・ペーターゼン教授は私にいくつかの会合で、マリア・モンテッソーリ博士と会い、会話したこと、モンテッソーリ博士が見せてくれた子どもの家で、彼女と並んで子どものいすに座って食事を取ったことなど語ってくれました。」(Margarete 1986:116)

からみて、少なからぬ問題があると捉えていたことが窺える。その点、自然科学的、医学的知見を持ち、また現代心理学の始祖の一人ヴント (Wilhelm Wundt) の心理学にも影響を受けたモンテッソーリは別格であったと考えられる。彼女の幼児教育 (ペーターゼンはそれを「幼稚園の実践」(Kindergartenpraxis) と不用意に表現しているが) には、科学性という点で評価すべきものがあることを把握していたとみることができよう (ペーターゼン自身もヴントからの影響を受けた人物の一人であった。彼の 1908 年の学位論文はヴント研究である)。

このことからすれば、ペーターゼンがその後就学前教育機関を併設する際、併設されたのがモンテッソーリの「子どもの家」であったとしても不思議ではないはずである。ところが実際に併設されたのは「子どもの家」ではなかった。1934 年 5 月、イエナ大学附属学校での 10 年にわたる教育実践を記念してイエナ大学に併設されたのは、「大学附属フレーベル幼稚園」(Universitäts-Fröbel-Kindergarten der Friedrich Schiller-Universität in Jena) だったのである。それは何故だったのだろうか。

3. モンテッソーリからフレーベルへ？

ペーターゼンの思想の流れをたどると、1930 年代初頭を境に興味深い転換が見られる。それを確認するため、まず、ペーターゼンが大学附属フレーベル幼稚園を設立するに至るまでの流れを一瞥しておこう。

1923 年 8 月、ペーターゼンはライン (Wilhelm Rein, 1847 - 1927) の後任としてイエナ大学教育科学講座の教授に就任する。翌 1924 年 5 月、ペーターゼンはラインの教員養成所を「教育科学研究所」(Erziehungswissenschaftliche Anstalt) へと変更し、その所長を兼務した。さらに大学附属の「訓練学校」(Universitätsübungsschule) を「大学附属学校」(Universitätsschule) へと改編し、その校長も兼務することになった。この附属学校での内的学校改革案が 1927 年の NEF (New Education Fellowship) 第 4 回国際会議において「イエナ・プラン」と命名され、一躍有名になったわけである。

さて、前述したように、ペーターゼンが教授に就任した 1924 年、彼の主著『一般教育科学』(Allgemeine Erziehungswissenschaft) が発表された。この中でペーターゼンは次のように述べている。人間はもともと「共同体」(Gemeinschaft) に基礎を置いている。この共同体は「母なる腕」(Mutterarmen) であり、人間をその生涯にわたって支え、死ぬまで包み込んでくれる。人間は共同体の中へと成長する。

この意味で教育というものは、最も多様な仕方の自然な影響作用のもとで、全体にあって、また全体において自然な成長過程なのである。だから『人間と人類の全生活は教育という一つの生活である (Das ganze Leben des Menschen und der Menschheit ist Ein Leben der Erziehung)』(Fröbel)。(Petersen 1924:104)

ここでペーターゼンは彼の教育観をフレーベルの有名な言説につなげて述べている。チューリンゲン地方の生んだ著名な教育家であり、またイエナ大学ともゆかりの深いフレーベルを引き合いに出すことは不思議なことではないであろう。しかしペーターゼンの『一般教育科学』においては、まだフレーベル教育思想が詳しく展開されているわけではない。ましてやフレーベルの幼児教育への直接的な言及が行われてもいない。

ペーターゼンにとってフレーベルへの関心が、とりわけフレーベルの幼稚園への関心が高まるのは、1930 年代に入ってからである。特に 1932 年に行われたフレーベル生誕

150 年記念の講演「幼稚園および学校におけるその特殊な教育学的状況によるフレーベルの意味での少年の指導」(Die Knabenführung im Sinne Fröbels in Kindergarten und Schule nach ihrer besonderen pädagogischen Situation) が契機となった。この講演において彼は、フレーベルの『人間の教育』を引用しつつ、家庭の親であれ職業教師であれ、教育者はいつも一貫して「人間の価値と品位によって」(von dem Werte und der Würde des Menschen) 若者を導かねばならないとし、学校とともに幼稚園を人間教育の分枝として捉える視点を示している (Petersen 1932: 229)。

そして 1934 年 5 月、ペーターゼンはイェナ大学附属学校に「大学附属フレーベル幼稚園」(Universitäts-Fröbel-Kindergarten der Friedrich Schiller-Universität in Jena) を併設した。開始当初の児童の座席数は 20 から 22 席で、8 時から 12 時までの半日制であった (冬期は 9 時から 13 時)。

この幼稚園について、彼は 1938 年の論文「幼稚園と国民学校における家庭的教育」(Familienhafte Erziehung in Kindergarten und Volksschule) で報告している。その要点をいくつか挙げておくことにする (Petersen 1938:175)。

- (1)この幼稚園は装いを新たにスタートしたイェナ大学附属学校の存続 10 周年を記念して併設された。
- (2)この幼稚園は大学附属学校と「有機的」(organisch)に結びつけられている。それによって 3 歳から 14、5 歳までの約 120 人の少年少女に共通の「生活・教育共同体」(Lebens- und Bildungsgemeinschaft)の形成が目指されている。
- (3)「真のフレーベル幼稚園」におけるのと同様に、「家庭」(Familie)を学校生活の基準として採用する。
- (4)あらゆる教室空間は「居間」(Wohnstube)の性質から多くのことを取り入れる。
- (5)奉仕、献身、親切、寛容、愛、支え合い、責任、畏敬など、十全な意味で「家庭」が保持しているものと精神形成的諸力が合致する「教育的学校世界」(eine erziehende Schulwelt)を生み出すこと。
- (6)この幼稚園の設立とともにドイツの大学の中に「幼稚園教育学」(Kindergartenpädagogik)を生み出す研究所を作ること。

さらにペーターゼンは 1940 年の論文「フレーベルの『媒介学校』からドイツのフレーベル学校へ」(Von der Fröbelschen „Vermittlungsschule“ zur Deutschen Fröbel-Schule) を発表した。この論文において彼は、1934 年以来「真のフレーベル幼稚園と国民学校を有機的に結びつける」ことに努めてきたと述べている (Petersen 1938: VII)。そして重要な点は、次のことにある。すなわち、ペーターゼンが行ってきたことは、実はフレーベル自身が 1826 年の『人間の教育』で「精神的に、彼の教育学の根本から先取りしていた」ことを実現しようとしたものであったことである (Petersen 1938: VII)。ペーターゼンは、自らをフレーベルの精神を継承する者として捉えているのである。

では、ペーターゼンは 1930 年代以降、モンテッソーリについてはどのような発言をしているであろうか。それを挙げれば、次のようになる (Petersen 1931: 180)。

- (1)モンテッソーリ教具は秩序の原理を学んだり感覚訓練を行えるが、子どもの空想や形成衝動・活動衝動をさらにもたらすものではない。
- (2)モンテッソーリの思想体系や方法に対する批判。すなわち、「実証的思考過程」(positivistische Gedankengänge)や欠けている「共同体思想」(Gemeinschaftdenken)。
- (3)モンテッソーリの方法では自由な創造や遊戯が抑圧される。

おわりに代えて

一見すると、ペーターゼンは確かに当初評価していたモンテッソーリからフレーベルへと関心を移行したようにもみえる。しかし、モンテッソーリに関する彼の関心は、フレーベルの信奉者たちが行っていた幼稚園教育への批判であったわけであり、もともとフレーベル自身への批判ではなかった。モンテッソーリへの関心も当初から不十分なフレーベルの信奉者たちに対抗するためのものであり、その思想の再考と純化を実現できるものと期待される限りにおけるものだったとも考えられる。今後は、ペーターゼンが捉えていたフレーベルの信奉者たちの問題点や、幼稚園教育を含んだフレーベル自身の教育の全体構想と比較考量し、イエナ・プランにおけるフレーベル幼稚園の位置付けについてさらに考察を続けていきたい。

文 献

- Aurin, Margarete (1986): *Meine Begegnung mit Professor Peter Petersen*. In: *Montessori-Werkbrief*, 24. Jahrgang, Heft 3/4.
- Dietrich, Theo (1995): *Die Pädagogik Peter Petersen. Der Jena-Plan: Beispiel einer humanen Schule*, 6., verbesserte und erweiterte Auflage, Bad Heilbrunn: Julius Klinkhardt.
- Kluge, Barbara (1992): *Peter Petersen. Lebenslauf und Lebensgeschichte; Auf dem Weg zu einer Biographie*, Heinsberg: Agentur Dieck.
- Petersen, Peter (1924): *Allgemeine Erziehungswissenschaft*. Walter de Gruyter & Co.
- Petersen, Peter (1926): *Die Neueuropäische Erziehungsbewegung*. Weimar: Hermann Böhlau Nachfolger Hof-Buchdruckerei und Verlagsbuchhandlung G. m. b. H.
- Petersen, Peter (1927): *Der Jena-Plan einer freien allgemeinen Volksschule*, Langensalza: Beltz.
- Petersen, Peter (1931): *Der Ursprung der Pädagogik*. Berlin/ Leipzig: Walter de Gruyter & Co.
- Petersen, Peter (1932): Die Knabenführung im Sinne Fröbels in Kindergarten und Schule nach ihrer besonderen pädagogischen Situation. In: *Friedrich Fröbel. Ein Führer aus den Nöten der Gegenwart. Vorträge zum 150. Geburtstag von Friedrich Fröbel während der Blankenburger Gedächtniswoche*. Hrsg. von Elisabeth Leutheuser und Waldemar Döpel. Weimar: Böhlau, S. 211 - 255.
- Petersen, Peter (1938): Familienhafte Erziehung in Kindergarten und Volksschule. In: *Nachrichtendienst des deutschen Vereins für öffentliche und private Fürsorge*. Jg. 19. H. 6. S. 175-179.
- Petersen, Peter (1940): Von der Fröbelschen „Vermittlungsschule“ zur Deutschen Fröbel-Schule. In: Irene Knoch, Sonjamaria Mentz, Gertrud Stricker: *Kindergarten und Volksschule organisch verbunden*, VII-XLV.
- Retter, Hein (hrsg.)(1996): *Peter Petersen und der Jenaplan. Von der Weimarer Republik bis zur Nachkriegszeit*, Weinheim: Deutscher Studien Verlag.
- Retter, Hein (2007): *Reformpädagogik und Protestantismus im Übergang zur Demokratie. Studien zur Pädagogik Peter Petersens*, Frankfurt am Main: Peter Lang.